

[成果情報名]ビワ角斑病の発消長

[要約]*Pseudocercospora eriobotryae* によるビワ角斑病は、9月～10月および1月～3月の年間2回病勢が進展する。本病が感染するのは当年生の新葉のみであり、硬化した古葉には新たな病斑は見られない。

[キーワード]ビワ、角斑病、*Pseudocercospora eriobotryae*、発消長

[担当]農林技術開発センター・果樹研究部門・カンキツ研究室

[連絡先] (代表) 0957-55-8740

[区分]果樹

[分類]指導

[背景・ねらい]

大村市のビワ「福原早生」のハウス栽培園で2005年頃から、葉に黒褐色の斑点を生じ、後に落葉する障害が発生していたため調査を行い、*Pseudocercospora eriobotryae*によるビワ角斑病であることを明らかにした。本病は過去に本県でも発生が認められているが、病原菌の生態に関する詳細な知見が無く、本病の発消長や防除適期などは知られていない。そこで、本病の防除に資する生態的知見を得るため、発生状況を経時的に調査して発消長を明らかにする。

[成果の内容・特徴]

1. ビワ角斑病菌 (*Pseudocercospora eriobotryae*) はビワ葉に感染し、葉脈に沿った黒褐色の角ばった病斑を形成し、病斑の周囲はやや黄～赤褐色に変色する。病斑内部には黒色粒状の子座を生じて分生子柄および分生子を形成する (写真1)。
2. ビワ角斑病の病斑は当年生枝の春葉上では8月頃までは認められないが、9月以降10月にかけて徐々に形成され、激しく発病した葉から順次黄化して落葉する。夏葉および秋葉では、1～3月頃にかけて認められるようになり、発病葉は後に黄化して落葉する (写真2、3、図1)。
3. 前年生枝の古葉では年間を通じて新たな病斑は形成されず、落葉による発病葉率や発病度の変動はあるものの、病勢の進展は認められない (図2)。

[成果の活用面・留意点]

1. 調査園は2008年まではハウス栽培園であったが、調査を行った2009～2010年は本病多発生のため収穫を断念し、ハウスのビニル被覆は行っていない。
2. 園内の3樹から各3枝 (計9枝) を抽出して調査に供し、2009年8月から約15日間隔で、調査枝に着生している全葉について病斑の発生程度を調べた。
3. 9月～10月および1月～3月の年間2回病勢が進展すること、並びに、古葉に発病しないことなどから、本病は展葉期の若い葉にのみ感染し1～数ヶ月程度の潜伏期間を経た後に発病すると推察される。
4. 本病に登録のある農薬はない。

[具体的データ]

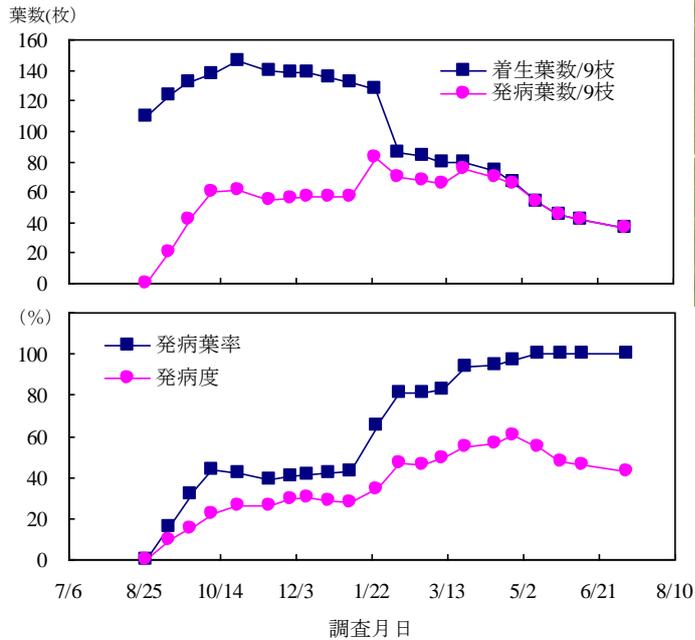


図1 ビワ角斑病の当年生枝における葉数と発病の推移
品種: 福原早生(2009-2010年, 露地栽培条件)

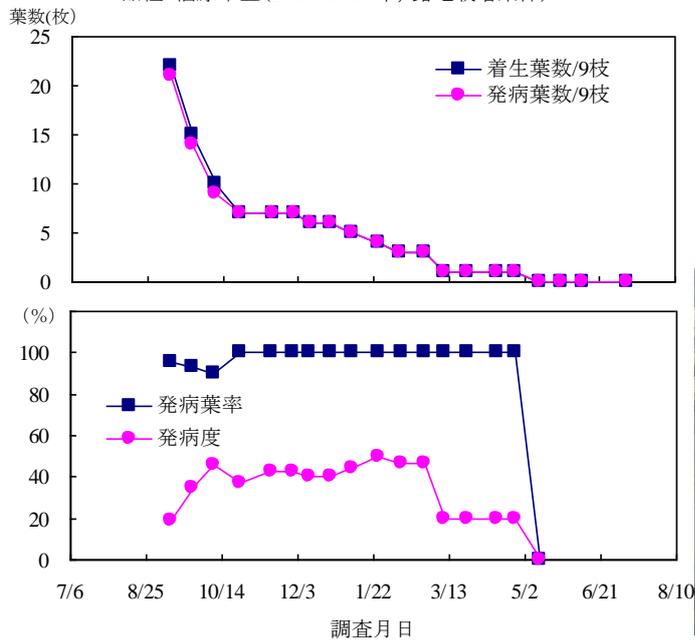


図2 ビワ角斑病の前年生枝における葉数と発病の推移
品種: 福原早生(2009-2010年, 露地栽培条件)

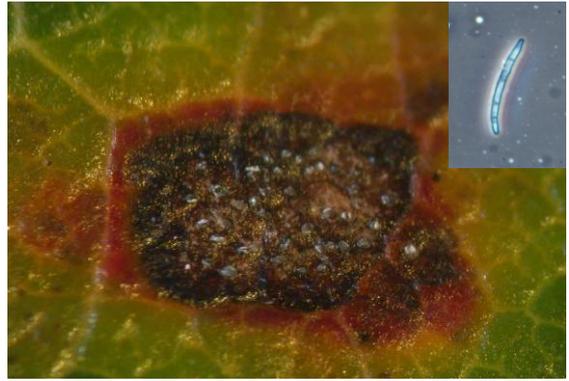


写真1 ビワ角斑病の病斑と病原菌の分生胞子



写真2 ビワ角斑病の発生状況(9月撮影)



写真3 ビワ角斑病の発生状況(1月撮影)

[その他]

研究課題名：果樹ウイルス抵抗性健全母樹の育成と特殊病虫害調査

予算区分：県単

研究期間：2009～2010年度

研究担当者：菅 康弘